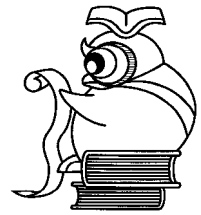


# ぱびるす

聖学院大学総合図書館報

第65号 (2017年秋)

特集：宗教改革  
500年



## 「宗教改革と聖書」

菊地 順



今年、宗教改革から500年を迎える節目の年です。1517年10月31日に、アウグスティヌス派の修道僧でヴィッテンベルク大学の聖書教授であったマルティン・ルターは、ヴィッテンベルクの城教会の扉に「95箇条の提題」を貼り出し、キリスト教の救いの理解をめぐる学問的な討論会を開こうとしました。しかし、その内容は人々を大いに刺激し、瞬く間にドイツ全土に知れ渡り、教会の改革運動へと発展したのです。

その背後には、ルターの「福音の再発見」があったと言われています。ルターは、従来のローマ・カトリック教会の教えを批判し、人が救われるのは、十字架の死と復活を通して罪の赦しをもたらしたキリストを受け入れる「信仰のみ」によることを主張したのです。そして、それは、「神の言葉」としての聖書を徹底的に読む中で与えられた確信でした。ルターが入ったアウグスティヌス派の修道会では、毎日7回の祈りにおいて詩編を読むことが定められていたため、ルターも150編からなる詩編を週にほぼ2回毎週読んだと言われています。そのように、ルター自身徹底的にキリスト教の源泉である聖書に向き合ったのです。そこに、宗教改革の大事な精神があります。

この精神は、当時の人文主義者たちによって唱道されていたことでもありました。人文主義者にとって、その源泉とは古代のギリシャ・ローマ文化でしたが、人文主義の第一人者であったエラスムスは、ギリシャ語の聖書を研究し、それを校訂・出版しました。それを後にルターがドイツ語に翻訳し(1522年9月に出版された『9月聖書』)、人々が直接母国語で新約聖書を読むことができるようにしたのです(その後、旧約聖書も複数の手助けを受けてヘブライ語からドイツ語に翻訳しまし

た)。そして、それが宗教改革の大きな力になりました(ゲーテンベルクの活版印刷術の発明が聖書の普及に寄与したことも忘れてはなりません)。そのため、しばしば、宗教改革は「エラスムスが卵を産み、ルターがそれを孵(かえ)した」などと言われます。

このように宗教改革と聖書は切っても切れない関係にありますが、実はルターに先立って聖書の翻訳の必要性に気づき、ラテン語訳聖書を英語に翻訳した人がいます。それはオックスフォード大学の教授であったジョン・ウィクリフという人です。宗教改革にはそうした先駆けがいたことも、この機会に思い起こしたいと思います。

(大学チャプレン キリスト教センター所長  
政治経済学部教授)



## 菊地先生のおすすめ本紹介

### 『新訳 キリスト者の自由・ 聖書への序言』

マルティン・ルター著 石原謙訳  
岩波書店 1955 121p  
ISBN 9784003380819  
(2階推薦100L 請求記号198.35 || L97)

この本でルターは、キリスト者とは「すべてのものの上に立つ自由な君主」であり、同時に「すべてのものに奉仕する僕」であると語り、何人にも従属しない〈自由〉と、何人にも従属する〈愛〉を語っています。

